

巻頭言

「わかりやすい」と「おもしろい」

理事長 新谷友良

時々、講義の講師を担当したり講演をしたりします。終わった後、親切な主催者はアンケート結果をくれます。その中で、ベストの評価は「わかりやすかった」のようです。逆は「わかりにくかった」ということになります。別の評価として「おもしろかった」、「おもしろくなかった」というものもあります。関西弁では「おもしろかった」、「おもしろなかった」です。

「わかりにくかった」という評価は厳しいものですが、講義を担当したものにとっても「わかりにくい」評価です。話しの内容が支離滅裂で整理されていなかったのか、話し方・準備資料に不十分なところがあったのかといった反省と同時に、どこの部分に分かりにくかったのか聞いてみたい、もっと説明したいという気がします。それに比べて、「おもしろくなかった」とアンケートに載っていると、それはかなり決定的な評価で、落ち込みは一段と深くなります。関西弁で「おもしろなかった」という反応は、営業のプレゼンテーションでも吉本新喜劇でも、にべもない100%アウトの評価です。逆に会社の入社面接などで「あいつ、おもしろい奴や」という評価が出れば、近日中に「内定決定」の連絡が来ると思います。

日経10月20日の夕刊に、作家の温又柔さんが「バーチャル空間では、世界の複雑さを感知するときの興奮や、わかっていたはずのことがわからなくなってくることの快感などよりも、より強烈な“わかりやすさ”や、単純な構図ばかりが求められていて、“わからなさ”は敬遠どころか、忌避されているように感じられる。」と書いています。また、前日の同じ夕刊に山田詠美さんが「近頃、感じるのだが、トップに近い男性政治家に限って、“親しみやすい”自分のテイストを公表する。スイーツ好きとか、アイドルおたくとか。そのディテイルが、いかにも、女子供（と、若い男）の好きそうなステレオタイプ。刷り込みはいかんね。私のまわりには、ホッピーと串カツの好きな女たちでいっぱいだよ。」と書いていました。

この二つの記事を選ぶのは、我ながら偏見に満ちていると思いますが、お二人とも、「わかりやすさ」ということのうさん臭さや媚びを敏感に感じ取っておられるようで、内心で「我が意を得たり」と喝采をあげました。

年寄りの憎まれ口はこの程度にします。今年一年皆さま大変な毎日をご過ごされて、お疲れさまでした。ぜひ、良いお年をお迎えください。